大正讀本

巻四

375.9
Fu10
資料室

41414
教科書文庫
4
810
41-1913
20000
39916

資料室

375.9
Fu10

大正二年一月二十四日
文部省檢定濟
中學校國語科教科書

藤村作編

大正讀本

發兌 大日本圖書株式會社

大正讀本　卷四目次

一　少年に寄語す……一
二　月雪花……五
三　喀喇崑崙嶺通過……一一
四　伊藤博文公を誄ぶ……一五
五　大和民族の將來……二〇
六　乃木將軍……二三
七　立原杏所……二九
八　佛濱の月夜……三四
九　南へ南へ……三八

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
39916
図書

一〇　淺野長政……四四
一一　本誓寺の五百羅漢圖……五〇
一二　堪忍……五四
一三　德川家康の遺訓……五六
一四　葉山の靈夢……五七
一五　海軍戰死者を祭る……六〇
一六　近江聖人……六四
一七　心の洗濯……七四
一八　木村長門守の奮戰一……八二
一九　木村長門守の奮戰二……八六
二〇　ルーズベルト全集の序……九一

二一　ルーズベルト熊狩の記……九四
二二　大海原の歌……九九
二三　笑話二則……一〇二
二四　太田道灌……一〇五
二五　開國の使節……一〇九
二六　藩老望月主水に呈する書……一一二

（目次終）

慷慨
輒
積聚（耳）

大正讀本　卷四

藤村　作編

一　少年に寄語す

凡そ天下の事、無責任の慷慨より容易なるは無し。人己に背き、事意の如くならざれば、輒ち嘲罵を以て自ら遣る。名は慷慨と稱し義憤と云ふとも、實は則ち不平のみ。多くの場合に於ては、陋劣なる主我的感情より來る所の不平のみ。是の如き慷慨又は義憤の幾百千を積聚すとも、徒に世を亂り人を誤るの

裨益　逃避　憫む　彝倫　盪然　僞善

外、世道人心に何の裨益かあらん。眞に世を憂ふるものは、徒に慷慨して已むべきにあらず。世豈戰を宣告して、逃避するものあらんや。吾人は救濟の方法を解せずして、徒に慷慨を事とするものの無責任を憫まずんばあらず。

少年口を開けば輒ち言ふ、「人は墮落せり、世は腐敗せり、名教地に落ち、彝倫盪然たり、一大革新なかるべからず。」と。言や壯ならざるに非ず、吾人希はくは少年諸子と共に現世の腐敗を承認せん。唯少年諸子にして是を言ふ、果して可ならんか。吾人は慷慨を惡しと謂はず。心の清き者は、僞善を惡まざるを得ず。

閲歴　品性　部屋住

人の正しきを好む者は、不義を憤らざるを得ず。慷慨・義憤は人情の最も麗しき發動として、吾是を少年諸子に見るを喜ぶ。唯其の位に居らずして之を言ふを咎むるのみ。吾人は、少年の本領他に在りて、此に在らざるを告げんと欲す。

少年の時代は修養の時代なり。學識を蓄へ、閲歴を積み、品性を養ふ時代なり。彼は、道德上に於ても、法律上に於ても、一個人たるの責任を有せざるなり。一個人の責任を有せざるは、即ち天の假貸せる修養の時代なればなり。彼は實務の人にあらず、社會の人にあらず、所謂部屋住の人なり。他日、實務の人・社

青春

快濶

退嬰

會の人としての、完全なる資格を得んが爲の準備時代にある者なり。　青春幾時ぞ。　彼は此の準備の爲に當に日も亦足らざるべし。　何の遑ありてか空言を弄して、其の本領を顧みざらんとする。　社會は少年の慷慨によりて、毫も益を受くるものにあらず。少年自らは却つて是が爲に大損害を被らん。　かへすがへすも、心得違と謂はざるべからず。

快濶・進取・樂天は少年の生命なり。　完全なる人生の開發は、此の生命ありて始めて望み得べけん。　不健全なる慷慨は、動もすれば人を憂鬱にし、退嬰にし、厭世にす。　是の如きは、少年にありては、即ち精神的に

煌々
玲瓏

赫々

有象
無象

死せるなり。　吾人最も是を恐る。

（高山林次郎）

二　月雪花

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照らす。　月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。　日は赫々として仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。　太陽が一たび出ると、群陰みな影を伏して、大小の有象・無象ことごとく照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤・貧富の分別を失はせてしまふ。　月の光は慰安の光である。　慈愛の光である。　炎熱を伴なはない清

無垢　詩的情緒　椰子　苦悶　嗟嘆

涼の光である。　皎潔・無垢・崇美と稱ふべきやさしい光である。　休息・安靜の夜に最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。　詩的情緒は油然として湧く。　晝の間は猛獸と鬪つて居る熱國の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。　熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の、人心の胸懷に沁渡る事は、恰もその影の、千草の露の玉每に宿るやうなものである。

東西・古今、喜悲・苦悶の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。　之を嗟嘆し、之を

純潔　乾坤　茅屋　霏々　瓊玉　料

吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の言語に充滿ちて居る。　月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも一層冷たい。　貧富・貴賤の差別なく、その純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似てゐる。　高樓・茅屋も皆同じ色に埋められる。　天から落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられる。　霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、まだ〻く中に瓊玉を敷く壯嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。　よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じに變りはない。　花・紅葉色

掩ふ
對照
淨土
贅澤

色の眺は、もとより美に相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉も無い冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡くしたものではないか。一年中蓮の花が開いて居るといふ極樂淨土も、決して我等の世界程樂しいものではあるまい。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としては、あまりに贅澤

詩趣
棺槨
豔(豆)麗

な感じもする。

花はその美しい色の外に、大方芳しい香さへ有つて居る。菜や大根の花までも無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價あるは已むを得ないが、山の花、野の花は、いづれも月や雪と同じ樣に、一文錢をも要しない。人世に花なくば、どれ程の寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を要するのである。月雪の眺は、その皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその豔麗・華美を以て人生を飾

り、人心を慰めるのである。

思へ、世界の一部には全く花を見ない國もある。終歲氷雪に鎖されてゐる北極に近い地では、氷は卽ち人の家である。この地方には寸紅の目を樂しませるものは無い。又之に反して、全く雪を知らない人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見る事がない。目ばゆき瓦斯・電燈の光に不夜城の觀を呈して居る繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出來ない。我等日本人は、昔も今も、この三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天賦の幸福ではあるまい

不夜城
擅
天賦

か。

三　喀喇崑崙嶺通過

（芳賀矢一）

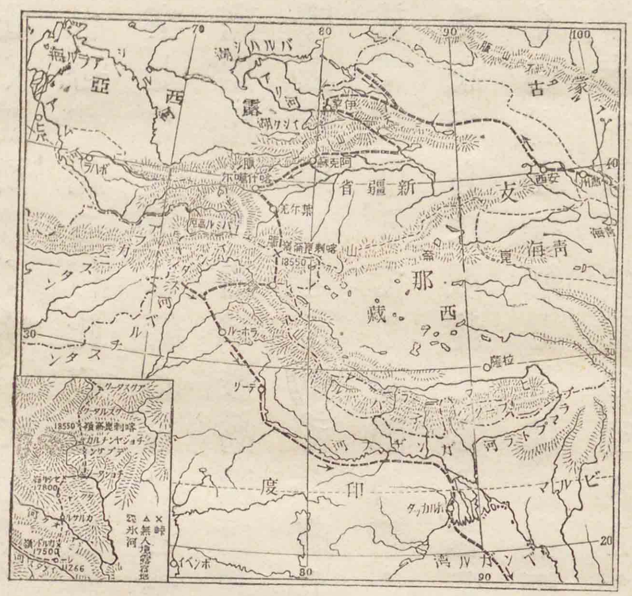
十月一日。氣溫日出前二十三度。日中四十三度。日沒二十四度。（天幕內三十三度。）

愈、本道中の最高嶺、海を拔くこと實に一萬八千五百五十尺なる喀喇崑崙嶺を通過せざるべからず。既に氣は重く、呼吸苦しく、頭痛亦堪へ難きに、なほ幾千尺の絕巔に攀ぢんとすなり。前途果して如何。たとひ如何なる困難の身に迫らんとも、他人の能く耐へん限りは、吾豈獨り耐へ得ざる理あらんや。祈る

鼻腔

は唯天候の異變なからんことのみ。
午前九時十七分バクソンブラク(或はクズルターク)を發し、緩歩徐行、南の方登坂に向ふ。傾斜甚だ急ならざれども、一歩々々に呼吸迫ること甚だしければ、數次休憩し、休憩少時にして又歩を移す。呼吸は斯くの如くにして繼ぐを得れども、頭痛は之を如何ともし難く、耳鳴り、眼眩まんとし、人馬共に鼻腔より血を滴らすに至る。聞く、人の將に溺死せんとするや、吸呼は次第に迫り、やがて鼻腔血を出して絶息するものなりと。水陸によりて多少の差違あるべしと雖も、我亦今にも息絶えんかと思ふばかりなり。

渇　駄載　暮靄



食慾盡き、渇氣絶え、身は壯健なるに、しかも重病の人の如し。歩めども歩めども歩むともなく、進めども進めども進むともなく、宛然夢に似たり。左右を顧みれば、同行顏色あるものなし。馬夫が坂下に駄載を改裝する間に、勉めて附近の撮影を試む。時に午後四時、暮靄既に起りて、光線の力足らざりしを遺憾となす。

一簀‖虧く
逼る‖眸
混沌‖
蒙昧‖
鴉‖啞々

斯くして遂に絶頂に達す。氷雪全く消えて更に痕なく、西風強く吹いて暫くも止るべからず。然れども、吾が此の行、此の嶺を通過し得ずんば、九仞の功を空しく一簀に虧くものと、かねて心に懸けし世界の高嶺昆崙山道の最高點に我いま立てるにあらずや。呼吸は逼れども、爭でか直ちに去るに忍びん。眸を放てば、波うてる四圍の諸山は、幾萬年の雪に埋もれ、さながらに混沌たる太古蒙昧の境を示す。密雲低く白雪と接觸し、荒涼・寂寞極まりなく、唯斃死の人馬を待つ數羽の鴉の、啞々として近く頭上を飛翔するを見るのみ。風益〻強く、寒愈〻甚し。俄然戰慄、肌膚粟を生ず。匆々降坂に向ふ。

破顔‖

登坂は緩にして短く、降坂は險にして長し。棒の如き兩脚を踏みしめ〳〵、且止り、且下り、午後四時五十分先づ第一の危險界を過ぐ。一行期せずして相顧み、破顔一笑す。爾後、谷に沿うて東南に向ひ、雪を蹴、氷を踏み、六時二十分チヨヂヤンチルガに到着す。行程十一里。此の日、嶺北に一泊の豫定なりしが、天候好良なりしかば、嶺南に達するを得たるなり。

（伊犂紀行）

誄ぶ

四　伊藤博文公を誄ぶ

樞密院議長伊藤博文公、韓國兇徒の狙撃する所となり、暴に清國吉林省哈爾賓驛に斃ず。嗚呼、哀しいかな。予何ぞ多言するに忍びん。然りと雖も予君と交る五十餘年、異體同心、生死・苦樂を共にし、國步艱難の秋に始まり、太平・富貴の日に至り、始終渝ることなし。自ら謂ふ「交友の誼今古に愧づる無し」と。予遂に復一言せずして止む可からず。予君に長ずること六年、君予の垂死を哭すること二回、予幸に君の交情・看護に因つて再生するを得たり。料らざりき、今日反つて君の葬を送らんとは。嗚呼、哀しいかな。

樞密院議長
兇徒
暴
渝る
誼
哭（コク）

回憶すれば四十七年前、文久癸亥の仲夏、君予と偕に發憤して海軍の術を學ばんと欲し、禁を犯し潛に泰西に航し、居ること纔に半年餘、馬關・鹿兒島の攘夷を聞き、意を決して急に還り、首として開國を唱へ、故國を危難より脫せしむ。内訌尋いで起り、予は暗夜要擊に遭うて殆ど死し、君は高杉を助けて兵を擧げ、藩論を回復し、我が一大危機を轉過せり。已にして王政復古し、乃ち徵士に擧げられ、版籍奉還の際、君木戸・大久保二公を佐けて尤も力あり。維新の績此より成就す。勅を奉じて憲法を創定し、長く國家の本

癸亥
偕
泰（タイ）西
纔
攘夷
還る
内訌
遭ふ
宏謨

俟つ
洵
該ぬ
淬礪
匪躬
寧處
孰(子)

を固くし、其の他法律制度の設、概ね君に俟たざる莫く、洵に組織の才を推す。四度總理大臣となり勳業の盛を極め、首めに韓國統監となりて保護の範を立つ。

君學漢洋を該ね、識東西に通ず。尤も東洋の平和を以て念と爲し、常に忠節・道義を以て淬礪し、王臣匪躬を以て自ら任ず。故に國民は仰いで文治の宗と爲し、外人は視て平和の表と爲す。留韓四年、歸來未だ曾て寧處せず。年七十に垂んとして、一歳の行萬哩を期し、節冬寒に向ひ北滿の野に見學す。忠君・報國の厚きに非ずんば、孰か能く此の如くならん。豈謂

異邦
訃、震悼
白叟(又)
紹ぐ

はんや、君の忠節にして茲の不測に遭ひ、暴に異邦の地に薨ぜんとは。嗚呼、哀しいかな。

君の訃、電聞す。皇上震悼、勅して國葬を行はしめ、白叟・黄童・織婦・耕夫も哀悼せざる莫く、乃ち外國帝王・大統領・大臣・紳士に至るまで、親しく弔電を發し我が不幸を言はざる莫し。内外新聞爭うて君の才德・勳業を稱賛し、中外著望の盛、振古未だ君の如きあらざるなり。抑、予は又之に因りて吾が國民に望むことあり。誠に君の死を哀しまば、則ち宜しく擧國一致、盡忠・報國、東洋の平和を維持するに務め、以て君の志を紹ぐべし。古人云ふ「匪以報公、維以報國。死者復生、信

庶瞑

我此言。」と。庶くは君をして瞑せしむるを得ん。嗚呼、哀しいかな。

（井上馨）

五　大和民族の將來

剩す

時は明治三十四年十一月上旬、處は紐育より佛國「プーローニュ」港に渡航する蘭船「リンダム」號の喫煙室なり。深更船客悉く散じて、剩す所伊藤公と記者と二人のみ。談、會、日本國民の將來に及ぶ。公曰く、

生存競爭

宇内各方面に於ける人類の生存競爭、日に益激烈を加へ來れる第十九世紀に於て、我が帝國の僅々四十年間に、斯かる長足の進歩を爲したるは、吾も人も均しく一驚を喫したる所なり。維新前五年、井上等と共に始めて英國に遊び、其の文物の燦然たるを目擊し、爾來尊王開國の爲に、一身を犧牲に供せんと決心したる予等と雖も、假令天壽を保つとも、己の存生中に、斯かる國運の隆盛を見得べしとは豫期せざりしなり。然らば今後は如何にすべきかと云ふに、人智固より限りあれば、二百年三百年の後を豫想する事を得ざるを以て、予等は己の思慮の及ぶ限りを盡くし、將來の爲に最善なりと信ずる措置を施して、後の賢者を待たんのみ。其に就きても、寒心に堪へざるはわが國民の態度

燦然

天壽

措置

傍若無人
驕る
繙く

なり。國民として、愛國心なく自重心なきものは、固より論ずるに足らずと雖も、我が大和民族は、人類盛衰の原則以外に立てる一種特別の人種なるが如く心得、他國の正當なる權利と利益とを無視して、傍若無人の行爲に出でんとする者あり。これ國を誤るものなり。古よりいふ「驕る者は久しからず」とは、啻に個人に就いてのみ然るにあらず、國家に就いても亦動かすべからざる眞理なり。史を繙いて盛衰の跡を見るに、國家の滅ぶるは、他之を滅すにあらずして、概ね自ら之を滅すなり。我が國民の如きも、此の道理を十分に理解し、上下

弦月
船房

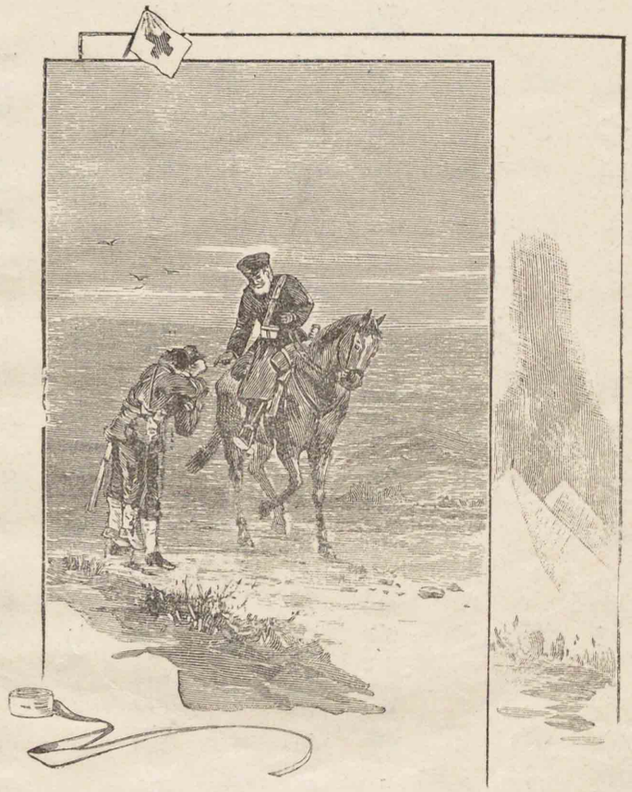
協力、事々物々に其の措置を誤るなくんば、激烈なる生存競爭場裡に立ちて、尙國家を泰山の安きに置くを得べし。くれぐれも我が國民の注意すべきは、「喬木風多し」の一語なり。

と。談終つて室外に出づれば、四顧渺茫、弦月鎌の如く、船は大西洋の波濤を蹴て進む。當直の船員曰く、「天候險惡の徵あり」と。記者は我が帝國の前途の安穩を祈りつゝ、船房に歸りて寢に就きぬ。（藤公餘影）

六　乃木將軍

つはものの武勇なきにはあらねども、

眞金なす



眞金なすペトンに投ぐる人の肉。
往くものは生かて還らぬ強襲の鋒をおばし轉じて、右手のかた、
圖上なる標のたかさ二零三、巓のふたつ聳ゆる石ゐまに、

屯（ゐ）
そびら
亡骸

たえだえの望のいとを掛けてこそ、きのゆゆふ、軍の主力を向けてしか。

霜月の三十日の夕まぐれ、將軍は高崎山の師團より、ただ一騎、柳樹房なる本營に歸らんと、曲家屯を過ぎたまふ。ほの暗き道のほとりを見たまへば、身うち皆血に塗れたる卒ありて、そびらには、はやこときれし將校の亡骸をうきのせてこを立てりけれ。

「汝は誰ぞ。そを何處にか負ひて行く。」

「聞召せ。脊負ひまつるは奴ゐが主と賴む乃木將軍の愛子なり。年老いし將軍の家の二人子、そのひとり勝典ぬしはいちはやく南山に討たれ給ひて、殘れるはおとうとの保典のぬしゐとりのゑ。脊負へるはその一人子の亡骸ぞ。父君は心をゝしく我が主をも隊附のまゝにあらをて、『討死の

いちはやし

宣る。

きいた頃

朝け

身の果はれのれと三人、葬をば
ひと時に營め。』と宣り給ひしを、
人々の強ひて計らひたるにより、
きいた頃友安旅團の副官に
職かはり、まだ程經ぬに、この朝け、
あへなくも空しき骸となりましぬ。

果てましし處は高地二零三。
目鏡もて敵の備を望みまを
うら若き額のただ中打貫かれ、
ひと言をれほせ給はんひまもなく、

くるほし

面ざし
かはたれ時
ゆ

持口の南の峰にうを給ふ。
その骸を奴脊負ひて、此の村に
ありと聞く野戰病院たづぬれど、
くるほしき心ゝらにやたづねえず。」

かくいぬを駒をとどめて聞きましし
將軍は病院の旗あるかたを、
鞭あげて「彼方ぞこそ。」とさし給ふ。
面ざしはかはたれ時に見えねども、
目ざとくも雲の絶間ゆ覗ひし、
さむ空にまだ輝かぬ冬の星、

闌く
睫
杏
物頭
忠狷
諫む
正室
揮毫

更闌けて、友なる星に、「將軍の
睫だに動かざりき。」と語りけり。

（森鷗外）

七　立原杏所

立原杏所、通稱は甚太郎、水戸の藩士にして物頭たり。人となり忠狷・剛直、權貴を避けず。平生の志死をもて國家に報ぜんとするにあり。

藩政の事につき烈公に諫をいれんとして、未だ其の機を得ざりしが、たまゝ水道橋邸へ、加州侯の正室來臨の事あるべしとて、饗應の設頗る善美を盡くし、座興に杏所をして席畫を揮毫せしめんとて、豫て其

墳墓　盃　陪す　無碍　所望

の命あり。　こは杏所繪事に精妙なるをもてなり。杏所命をうけ、「是我が諫に死すべき時なり。」とて、祖先の墳墓に告別し、妻子に水盃して出仕し、來賓の席に陪して、縱横無碍に揮寫するに、精神平日に十倍して、眞に其の妙を極めしかば、座中擧つて驚嘆す。

宴散じて、烈公氣色うるはしく、「今日の宴、汝が技能によりて一段の興を得たり。　さるにても、思ふにましたる筆力かな。　餘興に尙一紙を所望すべし。」とて、烈公自ら紙をのぶれば、杏所かしこまりて、すなはち袂より手拭を取出し、之を水にひたして、墨池の墨を悉く拭ひ、一揮して忽ち葡萄の草畫を作り、をはるとひとしく、直ちに手拭を摑んで烈公の膝に投付けたり。

戯弄物

烈公色を起し、「しや、甚太郎無禮なり。　狂氣せるか。」とのたまふ。　杏所引きしさつて平伏し、「否、狂氣も仕らず。　ただ今日は聊か國のため、甚太郎が一命を奉つて諫め參らせんと存ずるのみ。　そは甚太郎の職たる、國家一朝事あるに臨みては、一方の大將たるべき者なり。　然るを今日酒宴の席に召され、席畫をかゝしめて興とせらる。　御朱殿高貴なりといへども婦女子なり。　來賓貴重なりといへども加州家の室なり。　本藩一方の大將たるべき者、其の宴に侍し戯弄物となつて可ならんか。　是唯臣が恥辱のみならず、

實に本藩の面目を穢すものなり。そも〳〵甚太郎、本藩近日の有様を見るに、忠直なる者は日に退けられ、佞媚なる者月に進むこと、歎ずるに堪へたり。誰々は方正・公直の臣、誰々は謹嚴・誠實の士なり。しかるに頃日皆事をもて罷めらる。誰々は機智・巧黠、誰々は便佞・諂諛、皆正士の共に齒するを羞づる者なり。しかるに近來漸く用ひられて事を執り、現に此の御席に侍する者の如きも、多くは其の黨派なり。禍蕭牆に起らん日既に遠からず。甚太郎生存して國家衰頽の有様を見んよりは、寧ろ御手討となりて一刻も早く死せん事を希ふ。と、一々臣下を指名して直諫

穢す
佞媚
巧黠（黠）
諂諛
羞（羊）づ
蕭牆

すること數刻、烈公終に席を立ちて入るに及び、杏所其の席を去らず、謹んで命を竢つ。

夜半に至り、烈公再び席に出でられ、顏色殊にうるはしく、「汝が諫言の趣熟慮するに、申すむね一々其の理あり。余全く誤れり。依つて自今汝が諫に從つて、大に改革する所あるべし。尚此の後も、心付きたる事どもは遠慮なく申聞けよ。夜も更けたれば、退出してゆる〳〵休息すべし。」とありければ、杏所喜や極まりけん、「あ」といらへたるのみにて、聲をあげて泣く。暫くして更に申しけるは、「藤田虎之助は尋常得易からざる人物にて候。先刻諫を奉りし時、侍側の者い

竢つ
自今

づれも顔色變ぜざるはなかりしに、彼一人のみは、從容として更に平日に異なる樣候はざりき。是其の度量と操行とを知るに足るべきにて候。よく〳〵御目を懸けらるべうもや。」と申して去る。烈公の東湖を任用し給ふこと、實に此の時に起因せりとぞ。

（中村秋香）

從容

八　佛濱の月夜

望日

今年九月十一日、陰曆八月望日に當りければ、こよひの名月、海邊にて眺めばやとて、犬吠崎のあたりさして都を出でぬ。

本所より千葉、佐倉などを經て、松岸にて汽車を下り、銚子の市街を過ぎて、町はづれなる川口神社の丘に登る。こゝは大利根の海に注ぐ處なり。川の幅いと廣く、對岸に寸馬往き、豆人來る。左に銚子の瓦鱗を見渡し、右に鹿島の荒灘を望む。白帆遠く風を孕み、櫓聲近く咿軋として聞ゆ。

祠の後より、高原を横ぎりて、黑生濱に下り、磯づたひに君が濱を經て犬吠崎に登り、地藏阪を下りて佛濱に至れば、日は早、西に沈みぬ。此處に、海水浴の旅館二つあり。曉鷄館と云ひ、水明樓と云ふ。犬吠崎を左にし、長崎が鼻を右にせる、一曲の海濱の長さ十町

市街

瓦鱗

咿軋

祠

高阜　欄

ばかりの間、旅館より外には家なく、後には小松生ひ續きたる高阜を負ひ、前は直ちに俯して海波に臨み、自ら別天地を爲せり。　水明樓に投ず。

浴後、欄によりて海上を見渡すに、萬里渺として雲なく、暮色やうゝ波聲を罩めたれど、日は未だ全く暮れず。　犬吠崎の燈臺も未だ點火せざれば、月の出づるには猶程あらんとて、眼を座に移ししが、不圖、東の方を見れば、團々たる明月いつしか海を離れたり。離るゝこと數尺、未だ光線を放たず。　海は碧に、空は青し。　水天蒼茫の間、月ひとり紅玉を懸く。　月やうやく上りて漸く小となり、波光遠く月に輝きて、萬里

沖す　姫松、稷々　顆　蟋蟀　巖礁

金沙を散らし、沖に釣する漁舟の、四つ五つさかやに見ゆ。

白帆金波の中に入りて、忽ち見え、過ぎてまた消ゆ。月天に沖するに及びて、流光際なく、帆影また隱るゝ處なし。　燈臺の火光廻轉する毎に、西に明らかに、東に消ゆるは、月光と相鬪ひてその光を失へるなり。

滿潮の刻は過ぎたれども、濤はなほ磯に高く、海風は軒近き岸の姫松に、稷々の音をなせども、流石に枝上幾百顆の月影をこぼさず。　濤にまぎれざる松蟲・鈴蟲・蟋蟀の聲々、殊に秋氣を添へて冷かなり。

起ちて濱邊に下る。　巖礁の散布せるあたりを、濤と

屏障

痩す

芒鞋、隴

路を爭ひつゝ、犬吠畸を後にして、飄然として歩すれば、月はわが顔を照らし、風はわが袂をひるがへす。右は松丘自然の屏障を作り、左は大洋渺茫として其の際を知らず。水陸の間たゞ我が身一つを點ぜり。顧みれば、旅館影を沒して、樓上の燈光星よりも痩せたり。

（大町桂月）

九　南へ南へ

獵夫は往々にして、遠樹にある鷹鳩を見るに忙しくして、眼前の叢中に巨雉あるを知らざることあり。

到處尋春不見春。　芒鞋踏遍隴頭雲。

道破す警句

歸來笑撚梅花嗅。　春在枝頭已十分。

と古人が詠じたるもの、之を高遠に求めて卑近に失する、此の間の消息を道破したる好警句と云はざるべからず。然れども、これ豈一人のことのみならんや。我が國人が天與の寶庫なるマレー人の國を了解するもの少く、徒に歐米支那のみを語る者多きは、是も亦高遠に求めて卑近に失するものに非ざるなきか。

マレー人の居住地は赤道直下より起りて、南北に分布し、緬甸の北部に於ては、北緯二十八度の地を境とすと雖も、其の大部分は熱帶に屬す。　熱帶は自然の

人文

寶庫にして、唯此の寶庫を開くものよく富むを得べし。

蓋し人類が單に寒氣を防ぐ衣服、饑餓に堪ふる食物を以て足れりとする間は、其の土の産物を以て滿足するを得べしと雖も、人文發達し、生活の程度高まるに至りては、熱帶地の産物なくしては、殆ど生活に趣味を添ふる能はざるに至る。歐米人は今日、咖啡若しくは紅茶なくしては、其の生を樂しむあたはず。軍艦・商船の甲板にはチーク樹を用ふるを常とす。彼等は煙草なくして半日を過ごし得べしや。機那・阿片なくして今日の醫療を全うし得べしや。電信・

胡椒

硝石

電話機械の利用は、護謨なくして今日の如くなり得べしや。其の他、砂糖・獸皮・獸革・黑鉛・コ*ヽナット油・香料・胡椒・丁子・象牙・タ*ピヲカ・バ*ニラ・染料・タ*ンニー・硝石・綿・コ*コ・胡麻・塗料等は、必ずしも熱帶地方に限られたる物に非ずと雖も、主として熱帶地に産する物なり。此等の物を除きては、今日の文明及び生活を維持し得べからざるや明白なり

とす。思うて此に至れば、「熱帶殖民地を支配するものは、卽ち世界の市場を左右する者なり。」と云へるの、眞に深甚の意義有るを覺ゆ。和蘭は曾て世界の銀行なりき。是其の熱帶殖民地の貿易を獨占したるが爲に外ならず。西班牙（スペイン）・葡萄牙（ポルトガル）が曾て世界の覇者たりし時代も有りき。是其の東印度・西印度の富を壟斷したりしが爲に外ならず。英國今日の富裕も、印度以下の熱帶地を有するに因る所尠からず。英國と和蘭とが、十六・十七兩世紀の間、海上の交戰に寧日なかりしものは、卽ち亦マレーの海洋を制せんと欲したるに外ならず。然れば列國が今相競うて熱

覇者
壟斷
富裕
尠（少）し
寧日

帶に殖民地を得んと欲するもの、偶然に非ざるを知らん。見よ、千百年間猛虎の惡政に苦しみたる越南地方は、已に佛人がマレー人を基礎として一大帝國を建設しつゝあるあり。マレー半島の英國殖民地も、今や漸く國民的色彩を帶び來らんとし、米國も既にフイリツピン（フィリピン）を領有して、これが開拓につとめつつあり。唯獨り蘭領印度のみは、依然として泰平を保つと雖も、獨逸が老叔母の遺產として之を窺ふもの、一朝一夕に非ず。思ふに政治上にも通商上にも、マレー人の國は、今後最も多事多端なる局面とならんか。マレー人の國豈等閑に看過すべけんや。

基礎
局面

嗚呼、我が同胞よ、一億のマレー人は、英・佛・米の文化を受くる者の外、我が開誘を須つもの雲霞の如し。歐洲人がマレーの海を探る事數百年なれども、其の大寶庫たるは昔日と變化なく、今もなほ之を開くものを待ちつゝあり。日本國民若しよく此の大寶庫を開くを得ば、大國民の宏業茲に完成すと云ふを得ん。椰子の酒の生ずる處、芭蕉の果の累々として實る處、エメラルドの如き海水の淀む處、極樂鳥の舞ふ處、日本國民の多望なる將來は此の中に在り。（竹越與三郎）

一〇　淺野長政

大閤
宗徒

文祿の初朝鮮の事起る。同じき二年六月、淺野長政かの國に渡り、石田・增田等と相議し、諸軍勢を率ゐて、晉州城を攻落す。

此の年冬、大閤朝鮮の軍はかばかしからぬを怒つて、德川殿を始め、宗徒の大名を名護屋の陣に集め、「朝鮮の軍今のやうならんには、いつ事定まるべしとも覺えず。今は秀吉みづから向はんと思ふ。三十萬の勢を三手に押分け、利家・氏郷に大將せさせ、三道より向ひ、朝鮮を打破り、まつすぐに大明に攻入らん。本朝の事、家康さてましませば、心に懸る所なし。かたがた如何にや思ふ」と仰せらる。德川殿御氣色損じ

て、利家・氏郷等に向ひ、「日本の大名多き中に、かたがた二人選り出されて一方の大將を賜はらんこと、弓矢取つての面目、何事かこれに過ぎん。抑、家康苟も弓馬の家に生まれ、戰の中に年老いぬ。今この大事に及びて、いかで人々の後に留つて、徒に本朝を守り候ひなん。少勢には侍れども、家康も軍勢をひきゐて、必ず一方の先陣を承るべし。かたがたの御推擧を仰ぐ所に候。」と宣ひしに、彈正少弼長政進み出で、「暫く候徳川殿。殿下この年月の御振舞、昔の御心とやおぼしめす。年經る狐の入りかはつて候を、何事か宣ふべき。」と、申しもはてぬに、大閤御佩刀に手を掛けら

佩刀

れ、「やあ、秀吉が心に狐の入替つたるいはれ、きつと申せ。申し損じなば、しや首うち落してくれんず。」と、責め懸けく仰せけるに、彈正ちつとも騷がず、「長政等が如きは何百人が首刎ねられんにも、なでふの事か候べき。抑、此のとし頃、よしなき軍起して、異國のみにあらず本朝にも、父を討たせ、子を討たせ、兄弟を失ひ、夫に別れ、妻に離れ、歎き苦しむもの天下に滿つ。又それより兵粮の轉漕、軍勢の賦役、六十餘州が内悉くあれ野となる。けふ御參向あらんには、五畿七道の間、竊盜・強盜等蜂の如くに起りて、やすき心も候まじ。徳川殿いかに思ひ給ふとも、如何でこれを防ぎ

しや首

よしなし

兵粮

參向

畿（田）

て、動きなく御後を守り給ふ事かなふべき。此等の事を思ひてこそ先陣とは宣ふらめ。されば昔の御心ならんには、かほどの事などか御心づきなかるべき。かゝる御心のつかせ給ふ事、これただ事にあらず。一定古狐の入りかはつたるには候はずや。賤しき者の諺に、『人とらんとする鼈は、必ず人に取らる。』とは、此の御事にて候ぞ。」と、憚る所なく申しければ、大閤「鼈にもせよ狐にもせよ、おのが主と頼みたらん者に、雑言をはく條奇怪なり。」と、飛びかゝらんとし給ふを、利家・氏郷押隔てて、「人々御前に伺候せり。長政が首を刎ねられんに、御手を下さるゝまでも候はず。

一定
鼈
雑言

そこ罷り申せ彈正。」と云はれて、長政はさらぬ態にもてなし、人々に色代して己が陣に歸り、御使を待つて腹切らんとす。重ねて仰せ出さるゝ旨もなし。

かゝる所に、「肥後の國に逆徒起りぬ。」と早馬を參らす。大閤大いに驚き給ひ、德川殿に御使あつて、「長政具して御參りあれ。」と仰せらる。やがて長政めしぐせらる。大閤「肥後の國に逆徒起りぬ。汝が嫡子左京大夫幸長追討の使たるべし。」と仰せ下さる。長政大いに悅びぬ。又德川殿に向ひ給ひ、「幸長未だ年わかし。本多を副へて給ふべし。」と仰せらる。やがて彼の逆徒、國人等討つて參らす。軍をば出さず。（新井白石）

さらぬ態
早馬
嫡子

羅漢　彼岸　有緣　畢生　風教

一一　本誓寺の五百羅漢圖

われ嘗て深川の本誓寺に詣でて、五百羅漢の畫幅を拜觀したる事ありき。畫は菊地容齋が經營慘憺の筆に成りし大作にして、春秋の彼岸には、これを懸け列ねて供養し、普く有緣の參拜を許す由なれば、友人を誘ひて歩を運びしなり。

容齋が執筆の因緣については、哀なる物語あり。今日廣く世に行はるゝ前賢故實は、この歷史畫家が畢生の心血を絞りて描き成し、以て風教を補はんとしたるもの、辱くも畏きあたりより日本畫士の號を賜

書肆（聿）　上梓　筐底　紙魚　忘年の親友　磨　嫁　婚禮　調度

ひしもこれが爲なるべく、また和氣清麿に神號を追贈あらせられしも、或はこの書がその動機となりしなるべしとも傳ふ。されど初は、この十年苦心の作も發行の書肆なく、上梓の資なく、久しく筐底に籠めて、徒に紙魚の棲となるを待つばかりなりしが、この事餘りに情なく、折節は忘年の親友なりし福田行誡に向ひて、堪へがたき遺憾の情を漏らしたりき。時に幕末の頃、江戸牛込に、加藤金兵衛といふ商人あり。手の中の珠とかしづきし一人の女、年頃にもなりしかば、或方に嫁入らせしに、幾ほどもなくして身まかりぬ。婚禮のをり持參の衣服・調度、「今はこなた

婿
拱く
大徳
衆生濟度
賣代なす

におきても詮なし。唯歎の種ぞ。」とて、婿の方より里方に返す。里方には受取らず、「一旦遣はしし女の道具は卽ちそなたの物、それをかへさるゝは死したるものを離縁するやうにて、草葉の蔭にもいかばかり悲しからん。これはそなたへ。」「いやこなたへ。」と押問答の果、金兵衞は腕拱きて、「さらば吾に思案あり。今深川におはす行誠上人は、淨土宗の大徳、古今の名僧と聞くに、この聖に託しまゐらせば、衆生濟度の便りともし給ひて、なき女が往生の緣ともなりぬべし。」といふに、乃ち相談は決し、かの調度を賣代なし、なほ首尾を合はせて、一千兩の金を行誠に捧ぐ。行誠は

脫稿
宿望
應眞
施主

やがて容齋を招きて、「喜ばれよ、御身の志は成りぬ。印刷の料は調へ得たり。」とあるに、容齋は涙ぐむまで有難がりぬ。さてこそ、脫稿の後、約二十年にして、こゝに前賢故實の出版に取りかゝりしなりけれ。

「年來の宿望は今しも遂げたるに、いかにしてか此の大恩に報ゆべき。」と尋ぬるに、行誠は「善い哉、さらば五百應眞の圖を畫きて供養したまはば、亡者の爲、施主の爲、いかばかりなる功德ならん。御身の滿足より引いては世間の滿足も、ひとへに世を早うせしをとめの爲、それを悲しむ父母の爲なるを。」と示す。「それこそ吾にはふさはしき業。いかで加藤氏の名を萬

沐浴
齋戒
什物

世に朽ちせぬばかり。と沐浴・齋戒して畫き上げたるが、この本誓寺の什物なりとかや。

（藤岡作太郎）

一二　堪忍

予が友としける平澤何某といふ士は、堪忍つよき人なり。

ある時、主用ありて、人多く具して行きける道のほどにて、二階より齒磨をつかひて吐きたる唾の、あやまちて平澤が著せし上下へ、したゝかにかゝりければ、供人大いにいきどほり、その家に入り、唾を吐きかけたる者を引出さんとす。平澤止めて、「しばしこの家

したゝか

挾箱
詫ぶ
瑣細
打擲

をかるべし。」とて、その家に入りて、挾箱より著がへの上下を取出して著かへけるに、その家の者ども大勢出でて詫ぶ。平澤いひけるは、「あやまちなるべし。重ねて心をつくべし。」とて出行きぬ。供人「いかで其の儘にゆるし置き給へるぞ。」といへば、「けふは大切なる主用なり。かゝる瑣細の事に隙取るべきに非ず。わが常に守れる堪忍はこの事なり。」といへり。

その後、また私用ありて、その供人を引連れ出でけるに、折しも夏の頃、溝のけがれ水を打ちけるが、平澤が袴の裾より下をけがせり。供人また〳〵大いにいきどほり、已に打擲にも及ばんとせしを、押止めて行

罵(言)る

きければ、供人「いふかひなき事にて候」といふに、「さにはあらず。けふは私用にて出でたり。私に人を罵ること、士たる者の本意に違へり。ただ堪忍だにせば、世に恥辱といふことあるべからず」と云はれしとぞ。

（雲萍雜誌）

一三　徳川家康の遺訓

人の一生は重荷を負ひて遠き道を行くが如し、急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なし。心に望おこらば、困窮したる時を思ひ出づべし。堪忍は無事長久の基、怒は敵と知れ。勝つことばかり知りて負くる事を知らざれば、害其の身に至る。おのれを責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるより勝れり。

交渉

一四　葉山の靈夢

申すも畏けれども、*皇后の宮には、去る一月より葉山の離宮に御避寒あらせられけるが、二月六日の夜、餘寒身にしむをも忘れ給ひ、「日露交渉の急にして、やがて開戰ともならば、我が海軍や如何に」など、只管思ひ入らせ給ひて、御枕につかせたまひけるが、程もあらせず、白き衣著たる男の、御前遙に畏みて、「某は*坂本龍

不肖（肉）
捷
ものから
ものす

馬にて候が、此度露國と戰はせ給ふとも、ゆめ〳〵御心を煩はしたまふことあるべからず。身不肖には候へども、海の御軍を守護し奉れば、大捷疑ふべくも候はじ。御心安く思召したまへ。」と奏聞しけるに、宮には「坂本とや。」と、しばし打案ぜさせ給ふに、「坂本龍馬にて候。」とて、搔消す如く失せにけり。

「異しき夢見つるものかな。」と思召すものから、さまで御心に留めさせたまはざりしに、七日の夜も亦同じき夢を見たまひければ、八日の朝、侍醫を召して、「世にも不思議なる夢を見たり。それは云々ぞ。」との仰に、侍醫は畏みて、「彼の海援隊をものせる坂本龍馬の靈

瑞夢
馨（香）

にもや候ひけん。事あらん折、我が海軍の大捷せん瑞夢にて候。」と祝ひ奉れるを、やがて主上聞召して、「龍馬の功勞今はた新なるを覺ゆ。誰ぞ龍馬の事詳かには知りたる。」と宣へば、「宮内大臣こそ。」と近侍の人々の申すに、「さらば召せ。」と仰せられければ、此の由大臣へ申し通じぬ。

大臣急ぎ參りて、「龍馬の人物はかく〳〵、性行はしかじか、殊に、薩・長聯合の爲に、井上馨と共に鹿兒島に赴きて、老西鄕等と交渉せる始末は、馨こそ最も委しく存じ候へ。」と奏聞せしに、御感斜ならず。「されば、こそ、忠義の鬼となり、今も我が海軍を護るらめ。これは

天機伺

まことに瑞夢なり」と仰せたまひき。井上馨が天機伺として參上せし折にも、此の事を親しく御物語ありきとなん。

夙夜御心を懸けおはしますは、日露の交渉なりければ、遂に異しき御夢をさへ見そなはし給ひけん。これしかしながら、全く瑞夢におはしまして、其の明くる日、仁川・旅順の大捷を得たまひつること、不思議と云ふも愚なり。

（軍國美談）

一五　海軍戰死者を祭る

旅順開城の報を得て、邦家の爲に慶喜したると同時に、私情として絶望したるは、終に生存せる諸子を見る能はざりしこと是なり。

客歲

寤寐

壯圖

衷（衣）心

客歲四月三十日、第三回閉塞隊の行を送りて、三笠艦上に諸子と訣別したる以來、茲に半歲有餘、其の間作戰の進行に伴なひ、寤寐に忘れざりしは諸子の消息なりき。固より此の獻身奉國の壯圖、生還は諸士と共に我等戰友の期待せざりし所なりと雖も、なほ衷心の情誼は、潛に諸子が萬死の裡に一生を得んことを祈望するを禁ずる能はざりき。然るに今や遂に空望に歸す。更に哀悼・痛恨の增すあるを覺ゆ。

回想すれば、彼の閉塞實施の當夜、南風俄に吹荒れて、

齟齬　邁進　踵ぐ　危惧　進捗　殲滅

各船相失し、爲に豫定の計畫多少齟齬したるに拘らず、忠勇義烈なる諸子は、風濤に屈せず、敵の砲火を冒し、斷然死地に邁進して、敵港閉塞の目的を達しぬ。我が大軍の海上輸送を容易ならしめ、百有餘隻の運送船、連綿黃海を渡り、十數萬の大兵相踵いで上陸進攻するに方り、常に敵襲の危惧なからしめたるもの、實に諸子が決死敢行の力與りて最も大なりとす。爾來海陸の作戰順を追うて進捗し、諸子が封鎖したる艦隊は殲滅し、諸子を猛擊したる要塞も、終に陷落するに至りたるもの、諸子等忠死の功其の因をなせりといふべし。

惟ふ　空前　史乘　響く

惟ふに此の企圖たる空前の壯擧にして、武人の死處これに優れるものなく、以て一世を激勵し、後進を感奮せしむるに足る。嗚呼、今諸子亡し。然れども、赫たる武名は、永く史乘を照らして萬世不滅の好鑑たるべし。諸子それ瞑すべく、我等戰友亦以て慰むべきなり。

本職會、京地にありて、茲に諸子の葬に會し、聊か懷を述べて我が聯合艦隊戰友の弔詞に代ふ。諸子靈あらば尙はくは來り饗けよ。

明治三十八年一月二十五日

聯合艦隊司令長官東鄕平八郎

櫻狩

凜冽

朦朧

一六　近江聖人

「雪ならば幾たび袖を拂はまし花の吹雪の滋賀の山越」。それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の眺も飽かぬ旅なれども、是は習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を沒し、凜冽たる風は膚を裂く。辛苦の中に滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景。辛崎の松は暮靄朦朧の間に隱れて、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴き渡る。見渡せば白雪皚々たる比良の雪、今より此の山路に掛らば、山中にて日は暮れん、疲れし足の進み難きに、坂本の邊にて

縋る

宿を求めんかと、獨旅の少年は前路を睨んで暫く湖畔に立ちたりしが、良ありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば我が故郷、今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しく此所に留らん、夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸らば疲も厭はじ、いで〳〵心を取直し、今宵の中に此の山を越えんものをと、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそは掛りけれ。

痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖に縋りて只一人、辿り〳〵て行く道の、岩に躓き木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、猶も心を勵まして、風雪の中

を登り行く。軈て日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、彌增す寒さは骨に徹りて手も足も凍る許。一山寂寞として、耳に答ふる者とては、閉ぢし氷の下潛る細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響なんど、幽かに物凄く聞えて、怖ろしとも悲しとも譬へん樣なし。斯かる難處と知りもせば、麓にて一夜を明ししものを、旅馴れ

谷る

一入

ぬ身の悲しさ、足に任せて此の深山路へ掛りしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。少年は進退谷りて、半ば死せる者の如く、松の根方に打倒れたり。起きも得上らず、少時降る雪を恨めし氣に眺めてありけるが、腹は次第に餓を感じて、寒さは一入身に沁渡り、眠るとも無く死ぬとも無く、前後も知らずなりにけり。

* * * * * * * * *

懷かしの故郷や、藤太郎は昔覺えし山川・草木を眼の前に見て、忽ち足の疲も打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さ

須臾（白）

衡門

修竹

に閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起出でず。彼の家は我が友の家なりけり、此の家には我に優しき老人有りきなどと、昔の事を想ひ出でて、坐ろに哀を催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。

見れば衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて復昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり、築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人無ければ枝繁れり。修竹一叢思ふ儘に根を延ばして、彼方此方に生ひ出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方を見れば、

軋る

車井の軋る音さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確に母人なり。少年は忽ち胸塞りぬ。昔は許多の男女を使ひ給ひて、勝手などに出でられし事無き母様が、此の雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情無しと、湧出づる涙禁め敢へず。急ぎ車井の側に駈行きて、後より其の袂を引き、「母様、汲みませう。」と涙ながらに取縋る。

事の不意なるに母は驚きて振返り、「誰か、藤太郎、如何して此處へ。」藤太郎は細き聲、「はい、母様の御手助を致しに參りました。先づ内へお入り遊ばせ、お頭髪へ雪が掛ります。」と孝子の眞情、片時も母を此の雪中

眉

颯（風）

に立たしめざらんとす。母は車井の綱を確と握りし儘石の如く立てり。「叔父様とでも御一緒か。」「いえ、一人で御座います。」母は聲を勵まし、「叔父様が一人和郎をお出しなされたか。」「いえ叔父様には知らせずに參りました。」母は眉を揚げ、「怪しからん、何故そんな事を。さあお話しなさい、和郎が歸つた譯を。いえ、此處で聞きませう。聞かない内は、滅多に家へは入れません。」颯と吹來る朝風に、地上の雪はくるくると捲揚げられて、横に二人の顔を撲つ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

藤太郎はありし次第を物語りぬ。母は我が子の優

咽ぶ

天晴

しき心根に、すゞろに涙に咽びしが、忽ち思ひ返しけん、態と言葉を勵まして、「和郎は此の母の言葉を忘れましたか。和郎を叔父様に賴む時、一旦國を出たからは、天晴立派な人にならない内は、決して中途で歸るなと、彼程堅く言聞かせた事を忘れましたか。此の母が難儀を忍ぶのも、唯和郎を立派な者にしたい許。立派な者にならないで、家に居て手助を仕てくれたとて、何のそれが嬉しからう。一人で來たものなら、一人で歸れん事はあるまい。母は再び逢ひません。其の足ですぐ大洲へお歸りなさい。」

餘りの事に、藤太郎は默然として言葉も出でず。力

邪魔
沾む

拔けて、雪の上に跪きぬ。母は其の失望せる様子を見て、痛はしさ胸に滿ち、斯く迄我が身を思うて來りしものを、百里の道の一人旅、定めて憂き事も、辛き事も多かりしならん、せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにして復思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば、修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを。「和郎は母の言ふ事が解りませんか。」と強くは叱れど聲は沾みぬ。

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて、「はい解りました。」「それならば今から歸

咬む
屹輝

りますか。」藤太郎は悲しき聲、「はい歸ります。」と素直に言ふ。母は素直に答へられては、猶更腸の絞らる思。遂に堪へ兼ねて忍び泣き、袖咬みしめて聲を飲む。

藤太郎は屹として立上れり。「母様、此の藥は輝の妙藥で、世にも得難き品、是差上げたいと態々持つて參りました物。是だけはお取りなされて下され。」と新谷にて得し妙藥を差出す。母は快く「おゝ和郎の志、是だけは受けませう。」と手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合はす顏、互の眼には涙一杯。

母は恥づかしと、じつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、藥を手より取落してうつ向けば、雪の上にほろ〳〵と落つる涙。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

雪は尙霏々として寒風に飛べり。母が汲み置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心を勵まして、泣く〳〵我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。滿天の風雪路悠々。

（村井弦齋）

一七　心の洗濯

江戸神田邊に、至つて貧乏な大根賣がありました。或日例の通り一荷の大根を荷ひ、朝早うから賣り歩いたが、どうした事やら、其の日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見れば、はや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらぬ。これはつまらぬ、此の大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ち明日は釜の中に蜘蛛の巣がはる。どうしたらよからうと工夫しながら、いつのまにやら、兩國橋を渡り、本庄の屋敷町を「大根」「大根」とうりあるいた。

或おやしきの表長屋の窓のうちから、「これ大根屋」と

把
八つさがり
化く

知行
むしこ窓
高塀
月代

呼ぶ。やれ嬉しや、先づ知行にあり付いたと、呼ぶ處を見れば、表御門から右へ三つ目の、むしこ窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が、表御門から荷を擔ひ込んで、お長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀の内、門口には、何某と標札がうつてある。荷を持込んで見れば、縁さきの障子をあけ、旦那殿が、今月代をそられたと見えて、鏡たてに向うて自分の髪を結びながら、「その大根はいくらぢや」といふ。「百に三把でござります」といへば、「夫は高い、二十四文宛にして置け」といはるゝ。賣りたさは賣りたけれども、現在損のたつ事なれば、「どうぞ三把にお買ひなさ

れて下されい。今朝から江戸中を泣き歩いて、まだ一把も賣れませぬ。どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、懸直は一切申しませぬ」といふ。彼のお侍かぶりふり、「夫でも高い。まからずば先づよしにせう」。と言捨てて縁先の障子をはたとしめられた。

大根屋もいろ〳〵というて見ても、かのお侍が相手にならぬ。そこで仕様もやうもなく、「はてつまらぬ、もう日の入には間もなし、何でも四百の錢を持つて歸らぬと、親子五人が明日の命が繋がれぬ。何としたものであらう」と手を組んで思案をしながら、縁先のかなだらひに、ふつと目がついた。障子はしめて

ある、あたりに見る人はなし、かの銅盥を、水の入つた儘で、大根二三把の下へそつと隱す。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が立ちどころに狹うなつて、五尺のからだを暫くも置く事がならぬ。

そこで荷をかつぎ出して、門口を出ようとすると、障子の内から、「これ大根屋。」と呼びかけられる。ぬからぬ顔で、「まかりませぬ。」といふと、「いや〳〵直はねぎるまい。其の大根買はう。」といひ樣、障子をさらりと明けられた。

大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ、「何把ほど入りまする、はした賣は出來ませぬ。」

といふ。「いや〳〵はしたでは買はぬ。其の大根みな買はう。此の緣先へ並べてくれい。」といはれる。

さあ大根屋も一所懸命。障子のしまつてある内なら、銅盥の出し樣もあらうに、今更銅盥が出されもせず、というて賣るまいともいはれず、逃げて行かうにも荷を捨てて歸つてはならず、千百萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろ〳〵としてゐると、かのお侍が、大根屋の顔をきつと見て、「われはきつううろたへて居るぞよ、まづ銅盥から出して、大根の數をかぞへて見よ。」といはるゝ。大根屋は總身に冷汗を流して、もう切られるか、ぶたれるかと、わな〳〵ふるへな

眞平

氣だて

がら、かの銅盥を恥づかしさうにそつと出して、土に手をつき、「旦那樣眞平御免なされて下されませ。何をかくしませう、先刻も申しまする通り、今朝からまだ一文の商もいたしませず、このまゝ歸りまするとし、明日親子五人がたべまする事がなりませぬ。かなしい貧のぬすみ根性、面目次第もござりませぬ。七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命をお助けなされて下さりませ。」と色青ざめて、土にあたまをすり付けて詫言をする。

彼のお侍、おもひの外氣だてのよい人で、さらに立腹のけしきも見えず。「いや〳〵其の詫言には及ばぬ。

まづ大根の數をよんで見よ。」といはるゝ。こは〳〵ながら大根を緣へ積上げた所が二十三把。かのお侍大根賣を呼んで、「さあ、其方がいふ通り、二十三把七百六十四文、序に銅だらひを添へて遣はす。貧のぬすみとはいひながら、われが根性はよほどよごれてあると見える。この銅盥は、顏や手足を洗ふ道具なれども、心の洗ひやうもあるものぢや。持つて歸つてとつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ。」と言捨てて障子をしめて內へはいる。かの大根屋も、これから本心になつて夜・晝はたらき、三年目には終に相應な八百屋になつたといふ事であります。

一八　木村長門守の奮戰　一

（鳩翁道話）

長門は鎧の袖にはらはらと涙を受けて、

「誠、今日の一陣をば、他人には渡さじと存ずれども、井伊が旗本の動かぬにと、今迄は猶豫しぬ。其の馬印が寄るといふは願うてもなき幸、本意の勝負も或はなるべきか。さるにても佐藤は」

といひも果てぬに、玉串川の堤を汗馬に鞭をあげ、畑道、畔道嫌なく、驀地に馳せ來る一騎の武者あり。これぞ長門が今も待ちわびたる郎黨の佐藤八左衞門。

串、汗馬
畔道
驀地
郎黨

看るく馬印の許へ駒駈けよせ、ひらりと飛んで下り、

「や、殿はいかにと存ぜしに未だ在ししか、嬉しや。後藤殿は今朝の程、最後の合戰目覺しく、伊達殿の手に討たれ、薄田殿も水野が手に掛つて見事の死を遂げられて候。」

といふに、長門は母衣串搖り上げて、上帶の端切つて棄て、從者に持たせたる十文字の槍搔い取れば、手下の五百餘騎も、「彌覺悟を定めたり。日頃の芳志報いんは此の時ぞ。」と勇み立つ。長門そのさま見て嬉しげに打笑みつ。「あはれ、この五百騎には、百萬の阿房

母衣串
阿房羅刹

羅刹も面を向け得まじきぞ。」と、穂先を揃へて突きかかる。之を見てさしもの井伊が旗下の先備も、退くともなく十間餘り却く中より、一層花やかに鎧ひたる若武者一騎衝いて出づ。

長門斯くと見て槍を引きしごき、我より名のらんと進むを、彼方早く聲をかけて、

「それなるは木村殿か。」

一目にこれと知らるゝも道理なり。長門その日の扮装は、四方白の兜に金の鍬形、丸に釘貫の前立、金銀を一つ隔に列べたる小札の紺絲の大鎧目眩ゆき迄なるに、腰には采配をさしはさみたり。闇にも紛ふ

兜、鍬形、釘貫

まじき物の具の様。

「いで一槍して今日の軍神に手向けうず。」

長門も微笑みて、

「年齢といひ、武者振といひ、和殿も當手の大將か。」

「いや誰ともあれ、勝負の後には自ら知らるべし。」

と一拍くれて、はや二三合突合ひぬ。長門も淺手深手四五ヶ所を負ひたるが、些とも怯まず。

「面倒なり、いざ組まん。」

といひさま雙方つと寄せて、馬上に引組みどうと落つ。長門透かさず取つて伏せ、内兜に手を入れて、

「名を名のれよ。井伊殿とのみ思ひしが、誰人ぞ。」

武者振

些、怯む

掃部

といふ聲の下、彼の武者は首を掉りて、

「名のるまじ。大將の井伊と思うて首を揚げられい。」

「憎い奴、長門を敵手に不足といふか、其の義ならば。」

と彼の武者の首ふつと切つて立上れり。

一九　木村長門守の奮戰　二

味方はと見れば、皆無慙、先刻よりの戰に擊散らされてや、我が旗の影さへなし。あゝ是迄なり。さるにても此の首掃部ならずば、冥途までの遺恨、要こそあれ、彼の敵の陣の様見てこんと、河原の砂山草少し生

縅毛

ひたる處に攀ぢのぼり、血に染みたる槍肩に衝き、動くか騷ぐかと睨まへたる背後の方に、思ひも寄らぬ聲、

「木村殿。」

長門驚きて屹と見しが、

「やれ久しや、お事は小源二か。」

「いかにも我は小源二。されど今は舊きを語らふ折でない。さ、唯一刻も。」

首をあげて前後に眼を注ぐは、此の手負を乘すべき馬やある、又此の殿の縅毛を見知りてつけ來る我が隊の兵やあると、眼の働を二様にして、心を配るもの

の如し。

「いや、さのみは騒ぐな。それよ御事は安藤家に養ひ取られしと聞きつるが、今の名は何といふ。」

「は、改めて長三郎。今は只早」。

落ちよとのみ急き立つる。

「落ちば落つる。況や御事は關東の士。以前は兎も角もあれ、今は敵の大將たる長門に遇うて、一槍ともいはぬは其の意を得ぬぞ。但し總べては此の首の主聞きたる上ぞ。御事幸此の手にあれば、知らぬことはよも有らじ、眞直に語れ」。

「あつ、愈〻本意、痛はしや」。

不覺

勘氣連座

長門扨はと膝押しかけて、不覺の涙せき敢へず。

「井伊殿か。」

「いや。」

涙の間より、

「實これは、山口修理殿が子息に伊豆守重信、打物とつては家中に竝ぶものなき達者。此の手に參られたる其の故は、父の修理殿仔細あつて大御所の勘氣を受け、豆州も其の連座にて久しう佐和山に籠居召されしが、此度の軍を幸、花々しい討死して、其の功に父御を再び世に出されうとの所存。しかも昨夜の事、高安の營所に我等を招き、明日は

具足　籠手　償ふ　睜る

城中に聞ゆる木村か、後藤か、眞田の中に組みたきが、御事懇意の長門殿、容貌は。と問はれて、我云々と答へたり。『さらば某が面と年齢の、井伊殿に似たるを幸、故と赤具足して掃部と見せ、其の人と勝負せう。』と打笑つて、唯物の話の様にせられたが、されど殿の手に掛つての最期、如何に本望。」

雨と降る熱涙には、籠手の金具も朽ちぬべし。

長門聞きもあへず、さる程の孝子と知らば、覺悟の此の首此の人に與へて、父の罪も償はせ、其の身の名譽にもさすべかりしをと、雙の目を閉ぢつ、睜りつ、胸に手を當て、暫くは茫然としたりけり。（塚原澁柿の文に據る）

富饒　果邁

二〇　ルーズヴエルト全集の序

方今商工業の覇國を以て居るもの、英・米・獨の三國を以て最と爲す。而して英は堅實を以て、獨は機敏を以て、米は活動を以て其の特色と爲し、世界の競爭舞臺に各獨得の技を試みんとす。就中米國の如きは近世新興の國、其の土地や廣大・富饒、其の人民や勤勉・果邁にして、今や生氣鬱勃、其の前途の繁榮測るべからざるものあり。余は現米大統領ルーズヴエルト氏を以て、必ずしも完全の人とするものにあらざれども、遙に其の言行を見聞し、壯剛・雄偉の面目、米國民

人格

活動の本色を發揮せるを憶ひて、常に其の人格を崇しと爲す。

消極的

余が最もルーズヴエルト氏に取る所は、其の正を踏んで懼れざる所に在り。而も其の守る所消極的に

積極的

あらずして、常に積極的なる所に在り。氏が頻々演出したるトラスト征伐の大壯擧の如きは、富の勢力

萬能

の萬能なる米國に於ては、非常の自信力と猛烈なる勇氣とあるに非ずんば能はざる所なり。氏が政治

公人

家として內外に對する政策の當否は、必ずしも說か

心事

ず、其の公人として、若しくは私人として世に立つに

歩武

當り、心事正大、歩武堂々、眞に男らしき豪爽の態度を

餘蘊

示して餘蘊なきに至りては、近世稀に見る所の模範的人物たるを疑はず。

時勢一轉すれば、之に處する道も亦一轉せざるべからず。今や我が國世界列強の班に入り、また消極主義の道德習慣に支配せらるゝを許さず。苟も帝國の未來を雙肩に擔ふ青年たるもの、常に正義を尊び、光明を望み、男らしき心事を以て勇戰力鬪せざるべからず。余が今日ルーズヴエルト全集の出づるを喜ぶは、其の秋霜烈日の如き言論が、我が青年を激勵するに於て極めて剴切なる

剴切

教訓たるを思ふが故のみ。以て序と爲す。

（大隈重信）

二　ルーズヴエルト熊狩の記

彎曲　湄　苺

余は險阻なる山の麓の彎曲せる谿谷の中に迷ひ入りぬ。暮色漸く迫りしかば、露宿せんと、淙々たる溪流の湄に地を相したり。地は一面に柔かにして濕りたる綠草繁り、赤苺の之に點ぜるさま、宛然毛氈を敷詰めたるに似たり。其の一端は樹蔭なり。地面の乾ける處を臥床となさんと、やがて其の用意を整へたり。天寒き夕暮、松鶴もあらば晩餐に供せばや

彷徨ふ　熟視　擬す　咆哮

と、一人銃を肩にして彷徨ひ出でたり。半哩の間狹く淺き谷に隔てられたる幾條かの峰を、余は默然として急ぎ行けり。峰は老松鬱蒼として枝を交へ、ただ谿間のみは木立疎なり。日は既に沒して、暮色蒼然四邊を罩めたり。

歸途に就かんとして、山の脊を登り詰め、約六十ヤード前方なる谿間を一瞥せしに、怪しげなる黑き物の余が目に入るものあり。之を熟視すれば、珍しや巨大なる一頭の灰色熊、首を低れて漫歩し居たり。銃を擬して一發を放ちたるに、彈丸は其の横腹に命中して肺を貫きぬ。熊は怒りて咆哮し、疾風の如く突

月桂樹

ゐむ

藪

進し來りしかば、擊止めんと、斜に馳せて丘陵を下りしに、熊は五六百呎を疾走して、忽然として月桂樹の森に姿を隱しぬ。　此の森は其の幅三十ヤードに達すべく、長さは之に二三倍すべし。　熊はこれに入りたるまゝ出で來らず。　余は丘に攀上りて暫く彳みて居たりしに、荒々しくも悲しげなる聲の林間より聞えしかば、その所在を發見せんと丘陵の頂上に立ち、熟視しつゝ、徐に歩を移して、藪の一端に達せし時、熊は突如として前面に現れ、身を廻らして余と對立したり。　泡立てる鮮血絲の如く口角より垂れ、爛々たる兩眼は闇中に燃ゆる焰に似たり。

肩の後方を狙ひ擊ちし彈丸は、心臟部を貫通して重傷を負はしめたるに、見るから巨大の灰熊は、憤激咆哮、血泡を吐いて純白の牙をむき出し、月桂樹の藪を突破して、一直線に余を目がけて猛進し來れり。　事は急なり。　仕損じてはならじと、倒木を跳び越えんとするに乘じて、第三の彈丸を發射したるに、あやまたず胸部より其の體を貫通したり。　されどなほ少しも逡巡の狀なく、自若として急進し、將に躍つて余を一攫し去らんとす。　余は更に其の前額部を狙ひ、引金を引きも敢へず身を傍に飜し、一刹那、立罩めたる硝煙の内に、余に痛擊を加へんとしたる熊の前

淋漓　弛む　轉輾　顎

脚を見き。熊は空を撃つて前によろめき、鼻尖を地面に突きつけて、此處に淋漓たる碧血の溜りを生じつ。起上りさま、なほ二三歩前方に踴躍せしが、筋肉俄に弛み、首を低れて、恰も手負ひの兎の如く、轉輾して地上に悶絶したり。余が放ちし第四の彈丸は、前額部を外れて開ける口を射、下顎を碎いて頭部に入り、こゝに致命傷を負はせしなり。日は早暮れたり。明旦を期してその皮を剝取らんと、余は熊の死體を切開したるまゝ、放置して、露宿をさして歸りぬ。

（ルーズヴェルト全集に據る）

すがら

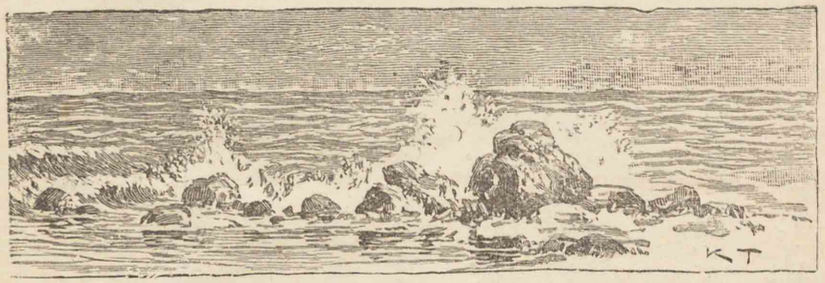
二二　大海原の歌

大なる哉、大海原。
朝に夕に、どう〳〵と
動き、轟き、夜もすがら
大浪小浪寄せ返る。
いづこに打たぬ浪を見ん。
いつ浪の音を聞かざらん。
大なる哉、大海原。
世界の山々ことごとく

瑠璃

朝ぼらけ

蓬(艸)萊山

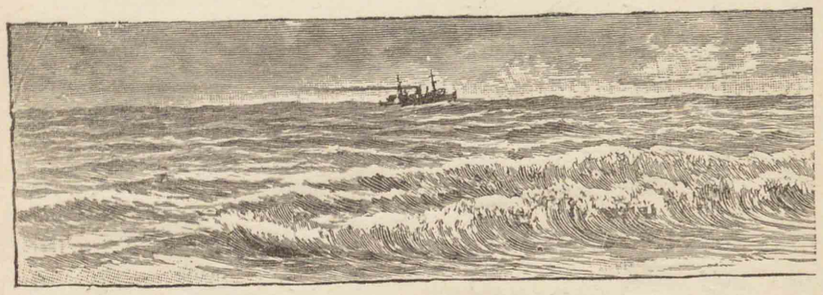


崩すとも、海は埋まるまじ。
世界の川々絶間なく
注げども、海はとこしへに
不増不減の瑠璃の色。

長閑けき様は海にあり。
風凪ぎはてし春の沖に、
朧にうつる月見れば、
あらぶる心もなぎぬべし。
松島かげの朝ぼらけ、
蓬萊山もよそならず。

はやて

涸る



凄じさはた海にあり。
春秋二季の大あれに、
はやて起つて浪立てば、
甲鐵艦も木の葉とただよひ、
大高じほの逆巻けば
村々流れて跡もなし。

山は崩れ、川は涸れ、
國興亡し、人變り、
陸には古今の別あれど、

開闢

海原のみは、開闢の神代の姿其のまゝに動き、轟き、寄せ返る。

（中學新讀本）

二三　笑話二則

假面

旗下某用事ありて、ある日淺草邊へ行きたりし歸に、途中さまざまの翫具を商ふ店ありし處を過ぐると、ふと我が孫のさぞ歸を待ち居らんと心に思ひしかば、駕籠傍の士に、「あの店にある假面を一つ買ひ來れ。」と命ぜしかば、其の者走り行きて、やがて潮吹の假面を買ひ、羽織の裾にて覆ひつゝ、そと駕籠の中に入れたり。某思ふには、此のまゝにて孫に與へば、直ちに被ること出來まじとて、駕籠の簾を卸し、脇差の小柄を拔き、懷中の鼻紙をとり出し、丈夫なる撚紙を作り、その面の穴に結付け、わが顏に押しあてて撚紙の長短をはかり、髮の後に引廻し試みるほどに、思はずこま結になりたり。その折ふし向うより一人の旗下來り行違ひけるに、雙方の徒士、何の誰さまと呼告げければ、駕籠傍の士何の心もなく、互に戸を一度に引きたり。そのとき某あわてて假面を取らんとすれども、こま結なれば遽に解けず。已むことを得ず

小柄

徒士

營中

はしたなし

假面の儘に會釋せり。これを見て、向うの人も其の供も、同音に皆笑ひけり。後々までも營中にて此の事を語り出し、かゝる可笑しきことは又あるまじと話し合へりしとぞ。

（閑話集に據る）

舟

ある處に四五人集りて酒を飲みけり。一人盃を取りて他に屬し、やがて肴をはさみけるを、うけたる人見て、われにくるゝものぞとおぼえて、持ちたる盃を下に置き、手をさし出せば、さにはあらで、おのれ取りて食ふなりけり。かのさし出したる手その儘に引きこめんもはしたなくて、「皆樣いかゞ、この私の手は

舟によく似たらずや。」といひて引きたり。（露が咄に據る）

二四　太田道灌*

文雅風流

管領

古の眞の武士は、文武二道に心がけたり。されば戰國爭亂の世にも、文雅風流のたしなみありし人少からず。太田道灌の如きも其の一人なり。

道灌は初、左衞門大夫持資と云ひて、關東管領上杉定正の家臣なり。幼時より氣力盛にして人に屈せず、武道をのみ好みて、末恐ろしき少年よとうはさせられしが、壯年の頃鷹狩に出で雨に遇ひて、とある民家に入り雨具を借らんとせしに、主の少女一言の答も

なく、山吹の花一枝を差出す。持資心得ず其のまゝに歸りしが、後或人の「それは

七重八重花は咲けども、山吹の
みの一つだに無きぞかなしき。

といふ古歌の心なるべし。」と語るを聞きて、始めて身の無學を恥ぢ、それより和歌・文學に心を寄せたりとぞ。

其の後、武藏國江戸の地に城を築き、城内に文庫を營み、史籍・歌集・醫書・兵書等數千卷を藏め、暇あれば書を讀み、歌を詠じたりといふ。かつて將軍義政に見えんとて上京せし時、後土御門天皇勅して武藏野の様

を問はせ給ふ。道灌歌を以て對へ奉る。

露おかぬ方もありけり、夕立の
空よりひろき武藏野の原。

又「隅田川の都鳥は。」と問はせ給ふに、

年ふれどまだ知らざりし都鳥、
隅田川原に宿はあれども。

「さらば汝が館の風景は。」とありしに、

我がいほは松原つづき海近く
富士の高根を軒端にぞ見る。

と答へ申ししかば、叙感淺からず、御製を下し給ふ。

武藏野はかや原の野と聞きしかど、

かゝる言葉の花もあるかな。

或時の戰に、定正に從ひて夜海岸を通りしに、定正潮の滿干を知らず。道灌いふ「潮干たり、容易く進むべし」と。定正其の故を問へば、道灌

「遠くなり近くなるみの濱千鳥、
　鳴く音に潮の滿干をぞ知る。

といふ古歌あり」と答へたり。

寒村星霜

道灌の築きし江戸城は、後德川氏之を修築して、歷代將軍の居城とし、當時の松原つづきの寒村は、いつしか繁華なる江戸の都會となれり。星霜四百年、明治の大御代に宮城をこゝに定め給へるは、道灌の名譽

此の上なしとやいはん。

（高等小學讀本）

二五　開國の使節

行動

ペリー提督は日本に來る前から、日本政府に對して決然たる態度を執り、爲すだけの事は必ず仕遂げようと決心してゐた。勿論兵力に訴ふるは、取るべき最後の手段たらんことを望んでゐた。併し萬一の場合に備ふるため、艦隊は何時なりとも行動が出來るやうに準備を整へ、士卒は各部署に就くなど、全く戰時と同樣であつた。

其の後日本政府の警護船は、軍艦の周圍に近寄らな

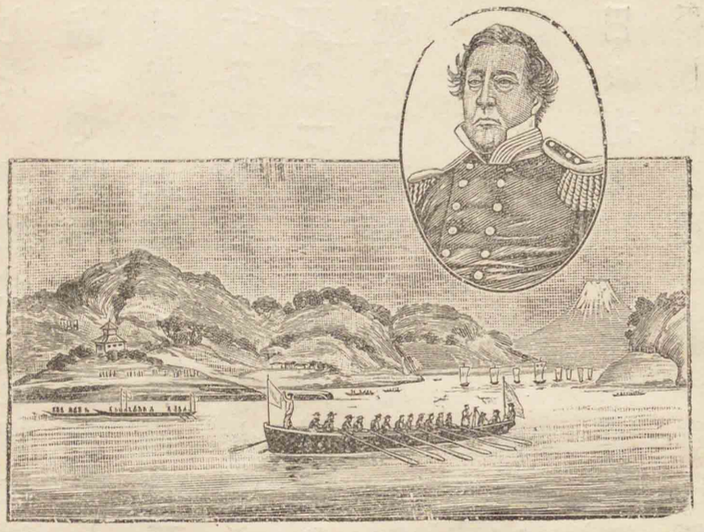
狼火
半鐘

かつたが、やはり遠くの方にあつて艦隊の行動を監視して居た。正午から日暮迄の間に、對うの陸で狼火が三四本上つたが、何かの合圖らしかつた。夜になると陸上の恐怖は又一層で、山々の上は云ふに及ばず、海岸は眼の届く限り、一帶に篝火を焚いて、終夜大きな半鐘の鳴り渡るのがよく聞えた。陸上はかく騒いで居るにも拘らず、海上は靜かなること湖の如く、夜の沈靜を破るやうな事は、何も起らなかつた。其の内旗艦の六十四封度砲が九時の號砲を放つと、夫が轟然と兩側の山に響き渡つた。すると篝火が見る間に悉く消されて仕舞つた。艦上では歩哨が

拳(手)銃
彗(ヨ)星
地平線

立つ、大砲の筒元に砲彈が積重ねられる、後甲板に小銃が配置される、其の他、端艇・拳銃・刀などの軍用品が手落なく用意された。

夜半頃、思ひがけなく珍しい彗星が西南の空に見えた。最初地平線上十五度許の處に現れると、空は一面に明るくなつて、檣や甲板や舷側は、一時に青光が燃え立つたやうに照り反



匿す　瑞祥

した。彗星は一直線に道を東北に取つて、軈て海に落ちて四時頃に影を匿して仕舞つた。其の時提督は「昔の人は、此の珍しい天上の現象をば、事業の成功する瑞祥と觀じたといふが、我々は之を以て東海孤獨の一國民を、文明國民の仲間に引入れる目的を成就する前兆だと思ふ。」といつた。（ペルリ提督日本遠征記に據る）

二六　藩老望月主水に呈する書

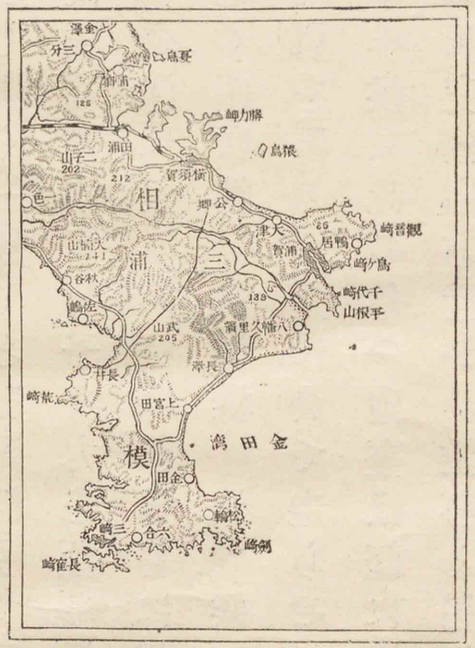
日々毒熱に御座候處、倍御萬祥に渡らせらるべく恭慶し奉り候。偖一昨日拜辭の後、直樣歸宅仕り、拜借の御書物等取調べ、直ちに出立、大森迄罷越し、夫より

倩ふ　艘　撤す　提灯

金澤に渡り申すべき存意にて舟を倩ひ候處、折節風の模樣あしく舟出しかね候と申す事故、又、金川迄罷越し、漸く一艘やとひ得候うて乘出し候處、南風強く波荒く候うて、舟子共力を極め働き候へども、舟進まず、金澤に至り候はぬ前、日暮に相成候。然る處風少しく西に轉じ候模樣に相成候に付き、舟子に申し談じ、帆を張りて、大津まで走らせ候。舟中より猿島を望み候に、此の島の砲臺は既に撤せられ候と承り候處、此度は備を置かれ候事と相見え、砲臺と覺しき處に火の光多く見え候。大津の陣屋濱手にも同じく提灯の光數多く見え候。大津にて岸に登り、夫より

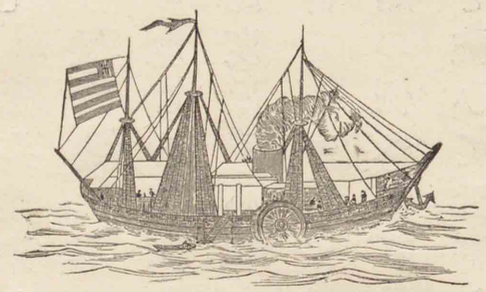
合印

山を越し、十八町にして浦賀に御座候。此度は御合印御座候提灯持參仕らざる方然るべくと相考へ、態態用意仕らず候處、此の夜けしからず明らかに候うて、山路の高低石の多少迄盡くよく分り、歩行少しも氣遣無く、浦賀に著仕候。時は、夜四つ半ばかりにて御座候ひき。かねて知る者に御座候故、小泉屋と申すに止宿。ま



錨

づあるじを呼出し、昨日異船渡來の樣子承り候に、蒸氣船の神速なる事言語に絶えたる由に御座候。松輪邊に異船の帆影見え候と申すやいなや、またゝく内、矢を射候が如く走り來り、彦根侯御持の臺場よりも、乘留め候心得にて乘出し候よしの處、皆及び候こと能はず。第一番に參り候船は、浦賀港を過ぎて、鴨居と申す處に錨を卸し、續いて蒸氣船に引き來り候ものの樣思はれ候よしに御座候。其の



これ無き船一艘入來る。是は先に立ち候蒸氣船の

竪

驕傲

與力同心

跡引續き蒸氣船一艘、蒸氣船にこれ無き船一艘、都合四艘浦賀港より江戸の方へ竪に並べ置き候事のよし。是迄渡來の船と總べて品替り候うて、乘組み居り候者共も事の外驕傲の體にて、是までは黑船渡來の度ごとに、與力・同心乘入り見分する事舊例に候處、此度は同心・與力の類、身分の輕きもの一切登る事を許さず、奉行に候はば登せ申すべくとの事にて、其の船の側へ參り候をも、手まねにて去らしめ候由。夫を強ひて近寄り候へば、鐵砲を打放ち候べき勢に御座候故、一番船に向ひ候與力は其の儘引返し、又彥根侯御人數の內にても、乘寄せ、強ひて登らんと致し候

處、空砲にはこれ有るべく候へども、二發打出し候に付き、是も致方無く、且は怖れ候うて引返し候由の話に御座候。いづれの國にやと尋ね候處、宿屋亭主には相分からず候故、其の儘休息仕候。

翌五日早晨に起出で、東浦賀より山に登り、鴨居と申す處の東に向ひ候處に至り一見仕候處、浦賀港口の東南十六七町の處に、大砲廿八門備へ候洋名コルヘットと申すべき船一艘これあり、其の東北四町程隔て候處に一艘、是は所謂蒸氣船にて、其の形コルヘットに比し候へば殊に大にして、比例し候に、五と三との如くに御座候。コルヘットも大略測量仕候に、其

の長さ二十四五間これあるべく候。蒸氣船は四十間ばかりと存ぜられ候。其の東北に同じく蒸氣船一艘、是は先のに比し候へば稍大に見え候。いづれも船腹に車輪を備へ候。其の輪の大きさ徑六七間これ有るべく候。蒸氣を生じ候爲の筒と見え候が、徑五尺ばかりにして舷より三間餘高く突出し候もの（みふち）これあり候。大砲の數は車輪の前に四門、後に二門、是は砲窓を開きこれあり候故よく分り申候。其の上に六門、是は砲窓を閉ぢこれあり候故かすかに見え候。さ候へば、是も二十四門を備へ候と存ぜられ候。夫より同じく東北に當り、砲廿八門備のコルヘット一艘、船と船との間いづれも四町ばかり並よく隔て、左右にコルヘット、中に蒸氣船二艘を置き候様子、船の結構よりして、いかにもきらびやかなる事に御座候。乘組の人數は四艘合はせて二千人ばかり、船印は（市松）此の如くにして、角の黑白は、俗に申す市松と申すものの様相見え候。持參仕候遠目鏡格別宜しからず候間、委しき事はわかり申さず、尚精しくは後便可申上候。

（佐久間象山）

きらびやか

大正讀本　卷四　終

註釋（卷四）

（我が國人の生死の年は年號で出し、西洋人には耶蘇紀元を用ひ、支那人はおほよそに何々の世の人と記した。）

○淺野長政＝尾張の人。豐臣秀吉に仕へ、慶長十五年に死んだ。年六十五。

○井伊＝直孝、掃部頭と稱し、德川家康に仕へて近江彥根を領して居た。大阪夏の陣に先陣となつて木村長門守を始め、敵の首三百十五を獲た。萬治二年七十一で死んだ。

○石田＝三成、近江の人、豐臣家の臣。德川家康を除かんとしたが、關原の軍敗れて三條河原に梟首せられた。

○西班牙＝(Spain)歐洲西部に在る一王國。

○伊豆守重信＝山口修理殿の條を看よ。

○伊藤博文＝山口の人、明治時代の功臣。明治四十三年ハルビンで朝鮮人に暗殺された。

○氏鄕＝蒲生氏鄕。織田信長に仕へ、後豐臣の臣となつた。文祿四年に死んだ。年四十。

○上杉定正＝扇谷家第六代の主。讒言を信じて太田道灌を殺した。是から漸く威望衰へ、明應二年山內顯定との戰に落馬して死んだ。年五十二。

○エメラルド＝(Emerald)綠玉。

○太田道灌＝上杉定正の臣。兵法に通じ、歌をもよくした。文明十八年に死んだ。年五十五。

○加州侯の正室＝德川將軍の女、將軍の女の諸侯の妻となつたものを其の頃御朱殿と稱した。

○掃部＝井伊直孝の事。

○菊池容齋＝名は武保、有名な畫家。明治十一年に亡くなつた。年九十一。

○木村長門守＝名は重成、豐臣秀頼の臣。大阪夏の陣に戰死した。年二十一。

○宮內大臣＝伯爵田中光顯。

○皇后の宮＝今の皇太后陛下。

○コヽ＝(Cocoa)椰子の實より製したる飲料。

○コヽナット油＝(Cocoa nut)古々椰子（ココヤシ）の實より製したる油。

○後藤殿＝名は基次、又兵衞と稱した勇士。初黑田長政に仕へ後豐臣氏に仕へて居た。豐臣氏亡びて自殺した。或は秀頼を奉じて薩摩に隱れたともい

ふ。

○コルヘット＝(Corvet)舊式小形の軍艦。

○坂本龍馬＝土佐の人。勤王家。慶應二年幕府の士近藤勇等に殺された。年三十三。

○左京大夫幸長＝淺野幸長、長政の子。

○薄田殿＝兼相。岩見重太郎と稱した名高い劍客。豐臣秀吉に仕へ、大阪陣には薄田隼人と稱へて勇名があつた。元和元年に戰死した。

○前賢故實＝菊池武保の著。神武天皇時代から後村上天皇時代までの賢者の像を畫き、小傳を附したもの。

○太閤＝豐臣秀吉のこと。

○立原杏所＝書畫家、水戸の人。天保十一年歿。年五十六。

○伊達殿＝伊達政宗の事。

○タピヲカ＝(Tapicca)カッサバの根から採つた澱粉質の食料。

○タンニー＝(Tanny)無色又は淡黃色の粉末。五倍子、又は槲・樫等の中に含まれて居る。工業や醫術に使ふ。

○德川殿＝德川家康の事。

○利家＝前田利家。織田信長・豐臣秀吉に仕へて大功ありし人、加賀の城主。慶長四年に亡くなつた。年六十三。（或は二）

○バニラ＝(Vanilla)一種の蘭科植物又は其の實。

○緬甸＝(Burma)印度支那の西北部地方にある國。今英國領。

○彥根侯＝近江彥根の城主、井伊掃部頭直亮。外國船渡來の爲江戸の防備として相模・安房・下總を守らせられた四侯の一人。

○フイリッピン＝(Philippine)東印度諸島中、北部に散在せる群島。首府はマニラ。今米國領。

○福田行誠＝字は晉阿、武藏豐島の人。回向院・傳通院・增上寺等に住職となり、明治十九年三月に病氣の爲に深川本誓寺に引込んだ。翌年四月又淨土宗總本山知恩院の門主に擧げられ、二十一年に亡くなつた。年八十三。

○藤田虎之助＝東湖と號す。水戸の人。安政二年の大地震の時、江戸で變死した。年五十。

○ブーロニウ＝(Boulogne)ドウヴアー海峽にある軍港。

○ペトン＝(Beton)コクリートの一種。

○ペリー＝(Perry)米國の水師提督。嘉永六年、浦賀に來り大統領よりの書面を幕府に呈して、互市を求め、翌年再び來て通商條約を締結した。

○葡萄牙＝(Portugal)歐洲大陸の最西部に位する一王國。

○本多＝本多忠勝、三河の人、德川家康四天王の一人。慶長十五年に亡くなつた。年六十二。

○增田＝名は長盛、尾張增田村の人。豐臣秀吉に仕へて居た。元和元年其の子盛次が大阪方に與した爲に死を賜はつた。時に年七十一。

○マレー人＝(Malay)マレー半島は亞細亞洲最南端に位するもの。此の半島及び近邊の諸島に住居せる人種をマレー人といふ。

○水野＝勝成、後藤十郎と稱した人。德川家康に仕へて大阪冬の陣、夏の陣に從ひ、敵の首九十七を獲た勇士。慶安四年八十八で死んだ。

○望月主水＝信濃松代藩の家老。

○ヤード＝(Yard)英國の尺度の名。一ヤードは約我が三尺一分八厘にあたる。

○山口修理殿＝名は重政、尾張の人。修理亮と稱した。故あつて主德川家康の心に逆つて髮を剃つた。大阪冬の陣に功を立てて罪を償はんとしたが果さず、夏の陣に子伊豆守重信と共に井伊直孝の手下に屬し、木村重成と戰うて重信は戰死した。後重政は高野山に隱れたが家康に召還された。

○義政＝足利八代の將軍、延德二年五十六で死んだ。

○ルーズヴェルト＝(Roosevelt)北米合衆國第二十六代の大統領。

○烈公＝德川齊昭のこと。

大正元年十月二十八日印刷
大正元年十月三十一日發行
大正二年一月十八日訂正印刷
大正二年一月廿一日訂正再版發行

大正讀本奥附

定價
卷一 金貳拾七錢
卷二 金貳拾八錢
卷三 金貳拾六錢
卷四 金貳拾六錢
卷五 金貳拾六錢
卷六 金貳拾四錢
卷七 金貳拾五錢
卷八 金貳拾五錢
卷九 金貳拾六錢
卷十 金貳拾五錢

著作者 藤村作

發行兼印刷者 東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地 大日本圖書株式會社
右代表者 專務取締役 宮川保全

不許複製

發行所 東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地 大日本圖書株式會社
郵便振替貯金口座 東京 二一九番

各府縣下 特約販賣所

各府縣下特約販賣所

東京府 丸善・青野・内田・三友・文林堂・大倉・水野・林平・杉本・文星堂・中西屋・文會堂・東京堂・二松堂・勉強堂・有隣堂・良明堂・東海堂・松邑・十字屋・北隆館・森江

栃木縣 弘集堂・勉強堂

静岡縣 吉見・三原屋・大石・谷島屋

愛知縣 川瀬・永東・柳正堂

長野縣 西澤・朝陽館・水琴堂・日新堂・聚文堂

群馬縣 煥乎堂

埼玉縣 高野

千葉縣 多田屋

茨城縣 川又・寺田・明文堂

栃木縣 煥乎堂分舗・青木

福島縣 磐岳堂

宮城縣 奏華堂・藤崎・今港堂

岩手縣 佐藤・文明堂

山形縣 牧野・八文字屋・盛文堂

秋田縣 曙堂・藤島・京海林

青森縣 今泉・今泉支店・青霞堂

北海道 川南・富貴堂・魁文舍・一二堂

新潟縣 北光社・目黒・覺張・高桑・萬松堂・萬松堂支店・野島

岐阜縣 郁文堂・郁文堂支店

富山縣 中田・清明堂・學海堂

三重縣 安屋・岩田

大阪府 松村・三宅・柳原・吉岡・今井

京都府 松田・若林

兵庫縣 熊谷・中井・福浦・竹内

奈良縣 木原

石川縣 宇都宮

福井縣 品川

滋賀縣 廣田

岡山縣 山陽書籍株式會社・廣尊堂・積善館・芸香堂

島根縣 久松堂・德岡・今井

鳥取縣 川岡

山口縣 超世館・日新堂・含英堂

香川縣 開文舍・開益堂

愛媛縣 靜壽堂

高知縣 向井・土肥

徳島縣 富士越

福岡縣 平安堂

長崎縣 五郎川

宮崎縣 修進堂

佐賀縣 平井・牧川

福岡縣 金文堂・佐野・積善館・博文社

熊本縣 長崎

大分縣 甲斐・中園・梅津

鹿兒島縣 吉田・金光堂

沖縄縣 小澤

臺灣 新高堂

大日本圖書株式會社

（大正元年十月調）